

東京家政大学 学修・教育開発センター

クレッド通信
2014.10

CREDD通信 01

Center for **R**esearch and **E**ducational **D**evelopment

学生と教職員の交流会
学生の学びを促す学修支援 P.2~3



造形表現学科のFD
板橋キャンパス良いところ探し P.7



教職員研究会
大学改革の推進について P.4



教職員研究会
3つのポリシー策定の意義と方法
カリキュラム・マップ作成ワークショップ P.5



私のFD
ランチミーティング P.6



お知らせ

大学IRコンソーシアムに加入しました P.8



第1回

学生と教職員の交流会

18:00～19:30 / Cafe Luce (16号館食堂)

前期の補講最終日である8月1日夕刻、
学生36名、教員23名、職員10名がルーチェに集い、
「第1回 学生と教職員の交流会」が開催されました。
交流会は、ワールドカフェ方式に従って、
以下のように進行しました。

※ 今回の交流会は試行的に開催したものです。
そのため、参加者募集が限定的であったことをお断りします。
今後、全学的な取り組みとしていくことを検討しています。

The World Café

- 第1部** 同じ学年の学生どうしてグループを作る。お互いの自己紹介から始めて、「東京家政大学のよいところ」「こうすればもっとよくなる」「教職員に望むこと」などを自由に語り合う。
- 第2部** 席替えをして、同じ学科・科の学生でグループを作り、教員・職員も加わる。第1部の話し合いの内容を紹介しあったのち、自由に会話を楽しむ。
- 第3部** 第1部の席に戻り、東京家政大学の未来のための提言、自分たちも関与できることはないかなどを話し合う。

今回の交流会は、異なる学年、異なる学科の学生どうし、あるいは学生と教職員の交流の場を設けることに主眼を置いていました。交流会の最後にアンケートへの回答を求めましたが、「今日の交流会について、感想や意見を自由に書いてください」という項目に対して、学生全員が交流を肯定的に評価する回答を寄せてくれました。この点において、交流会は成功だったといえるでしょう。回答の実例をいくつか挙げます。

————— 色々な学科の方たちと話ができ、楽しい時間を過ごすことができました。人数が少なかったため話しやすかったです。また、先生方と交流を持つことができ、自分たちが普段感じたり、考えたりしていることを伝えることができ、また、先生方からも

話を聞くことができました。授業以外での関わりが少ないので、先生方と自由に会話ができ楽しかったです。今後もこのような機会があれば、学生と教員との関係を深めるきっかけになるのではないかと思います。(育児支援専攻)

————— 4年生の先輩と学科の先生方のお話を聞いて、本当に今日このような交流会に参加できてよかったと思いました。普段の学校生活でなかなか先輩との関わりも無いので、年上の方のお話はとても参考になったし、近い将来に向けて自分は今何をすべきなのか、あらためて考えさせられました。他学科のみんなとも、お友達になれてよかったです。(服飾美術)

————— 他学科、他学年と、普段はあまり関わることのできない人たちと話すことが

でき、学科によって感じていることの違いや、やっぱりみんなも同じことを考えているのかと思うこと、気付かされることがたくさんありました。とても有意義でした。もっと時間があっても良いと思いました。(造形表現)

————— とても良かったです。特に学科の先生方に改善してほしいことを聞いてもらい、学校側、先生方はその問題に対してどのようにお考えになっているのかがわかって、とてもためになりました。(英語コミュニケーション)

————— 同じ学年、学科の人たちと交流し、新しいネットワークができた。同じように今まで頑張ってきた人たちと会えたことも、私にとって良い刺激になった。また、同じ学科でも、この会を通して仲良くなれた後輩もいたので、嬉しかった。他学科の先生方



東京家政大学をより魅力的な大学にするために 何をすればよいと思いますか？



と意見交換し、先生方も同じように考えていらっしやるのがわかったことも、とても嬉しかった。(教育福祉)

学生から提案を引き出すとともに、彼らにも動いてもらうきっかけを得ることが交流のもう一つのねらいでした。いろいろな提案(要望)が学生たちから出されましたが、どのような段階を踏んで「活動」につなげるのかは今後の課題です。着手点のヒントにしようと考えて、「東京家政大学をより魅力的な大学にするために何をすればよいか。あなたの提案を1つ書いてください」と聞きました。回答として多かったのは、学生どうし、学生と教職員との交流の機会の充実を挙げる意見でした。

————— 栄養学科では様々なキャリアを積んでこられた先生方がいて、普段からお話をしたり交流の機会を持ちたいと思っていますが、なかなか時間がありません。そこで、もっと教職員の方々との交流の機会を学生全体に対して増やしていけば、より魅力的な大学になると思います。(管理栄養士専攻)

————— 先生方もっとコミュニケーションをとれば、自分の狭い世界ももっと広がるのではと感じています。私たち学生側も積極的に先生方と少しでもお話ししたいと感じています。先生方との距離がもっと近くなるといいと思います。(心理カウンセリング)

そのほかに、「学食を開放するなど、地

域により密着した大学になるとよい」「栄養学科の学生と学食のコラボによって食の充実を」「パソコンの台数を増やしてほしい(とくに120周年付近)」「台風時の対応など、ポータル連絡をもっと早く」などの意見が寄せられました。今回の反省を踏まえたうえで、第2回の交流会を企画していきます。ぜひご意見・ご提案をお寄せください。

井上 俊哉(いのうえ しゅんや)

本学心理カウンセリング学科教授(心理統計研究室)、人文学部長、学修・教育開発センター所長。平成3年本学着任 / 研究分野: 教育心理学、心理統計学 / 著書: 『メタ分析入門』(東京大学出版会)、『心理検査法入門』(福村出版)、『心理統計の技法』(福村出版)



教職員研究会 ▶ 午前の部 【基調講演】

文部科学省研究振興局長 常盤 豊 氏



大学改革の推進について

「大学改革」にとどまらず、話は「初等中等教育での改革」に及ぶ幅広い内容であった。この2つの改革は「互いに考えを伝え合い、自らの考え・集団の考えを発展させる学習活動」に向けた教育改革という点でつながる一体的なものとの印象を受けた。

大学改革

いくつかの社会的課題が示され、それに対する大学へのニーズが示された。中でも、人口動態、都道府県別の進学率に見られる「地方の過疎化・都市の過密化の進行」が印象的であった。2040年には20～39歳女性人口が地方を中心に約半数の自治体において今より50%以上減少するという。また、大学等への進学率には、都市圏が高く（最高79%）、地方が低い（最低56%）地域間格差がある。これらの人口・地域格差、産業・就業構造の変化といった課題に向けて、性別のへだてなく幅広い年代の人々が広く社会に参加することが必要となっている。そこで、大学での社会人学び直しに期待がかかっており、文科省では、今後5年間で社会人の大学受講者数を倍増させることを目指している、との話があった。

また、「グローバル化によるボーダーレ

ス化」も強調された課題であった。企業は海外に市場を求め、海外での採用を増やしている。それに伴い、学生の就職活動では、海外の学生が競争相手となってきており、その傾向はますます強まっていく。そこで大学にはグローバル人材の育成、すなわち世界の中で、相互理解により、新しい価値を生み出すことができる人材を育成してほしい、とのことであった。

初等中等教育での改革

この話題に入るとき、常盤氏より「読む、書く、聞く、話す どれが課題？」という問いかけがあった。この4つの中で、私たちが学生に最も身につけてほしいのはどれか、という問いである。2、3人ずつに別れて5分ほど議論した後アンケートがとられ、「話す」が最多となった。その結果は常盤氏にとってめずらしかった様子ながら、私たちのよい特徴として話を進められた。

そして、平成20年1月に中教審が示した「互いの考えを伝え合い自らの考え、集団の考えを発展させていくという学習活動」を重視するに至る「つめこみ教育批判」、「ゆとり教育」、「脱ゆとり教育」といった経緯について当事者ならではの臨場感ある話に移っていった。この20余年の議論の末た

どりついたのは、「読む・聞く」→「考える」→「書く・話す」→「読む・聞く」→「考える」→… といった能動的な入力・出力を繰り返す学習スタイルである。そしてその潮流は、大学改革の重要な方向である「アクティブ・ラーニング」につながっていることが示された。まさに、初等中等教育での改革が、大学改革へとつながっていることを印象づける話であった。

最後に、東京家政大学にとって、うまくいっている今こそ、改革が必要とのメッセージによって締めくくられた。

Report Part 1

新関 隆
(にいぜきたかし)



本学環境教育学科教授（情報教育研究室）、e-kasei推進室室長、教育・学生支援センター副所長、学修・教育開発センター参事。
理化学研究所大型放射光施設計画推進室、東京工業大学理学部物理学科原子核物理学第二講座を経て、平成10年本学着任 / 研究分野：環境科学・情報教育・科学教育・放射線計測・原子核物理学



互いに考えを伝え合い、
社会を発展させる学び。



輩出すべき

人材像の目標設定にむけて。

教職員研究会 ▶ 午後の部【セミナー】

大阪大学教育学習支援センター副センター長 佐藤 浩章 准教授

3つのポリシー策定の意義と方法

カリキュラム・マップ作成ワークショップ



9月12日(金)の教職員研究会・午後の部では、今後本学がめざすべき教育・学修観(教学運営)への対応について考えるためのセミナーが開催された。

大阪大学教育学習支援センター副センター長である佐藤浩章准教授を招いて、「3つのポリシー策定の意義と方法」と題した講演と、「カリキュラム・マップ作成ワークショップ」が行われた。

講演のテーマである3つのポリシー策定とは、本学が「輩出すべき人材像の具体的な目標設定(ディプロマ・ポリシー: DP)」、そのために必要な「教育プログラムの設計と実施(カリキュラム・ポリシー: CP)」、そして人材育成目標・DPに合った「入学者の受け入れ方針(アドミッション・ポリシー: AP)」を、を設定することを意味している。講演のなかで強調されていた点は、入学した学生が学年ごとに到達目標を自覚・検証しやすいように、具体的に段階的なDPをまず設定する、ということである。

本学を含めて日本の大学教育は、「教職員は何を教えられるか?」という教育者中心の考えから、「学生は何を身につけられるか? (または身につけられたか?)」

という学習者中心の考えに転換しつつある。その転換に対応できるカリキュラムをデザインするために、これまでの「科目(個人の教育活動)の集積」から、「科目間で関連性を持たせた体系的なもの」に再構築される必要がでてくる。

このようなカリキュラムのデザインを目指すには、定期的に教職員が集まって、効果的なカリキュラムの開発手法を学ぶ機会を持つべきである。そのような最初の機会として今回の「カリキュラム・マップ作成ワークショップ」は、非常に有効な取り組みであった。各学科・専攻の教員と大学職員が共同で、模造紙に色別の付箋紙をつかって現状のカリキュラムをマップ化(ビジュアル化)した。作成時の注意として、①入学した学生がこのマップを見て、学年ごとの具体的な到達目標が立てられること、②学生はそうした到達目標を視覚的および体系的なイメージとして捉えられること、であった。そのための工夫を、ワークショップの時間内に考えて実行するという作業は、非常に頭を使ったと同時に、現状のカリキュラム体制の問題点や改善点を参加者同士で共有できた点でとても有意義であった。

大学全入時代が近づき、今後の大学教育は誰にでも受けられることが予想される。このことは、大学を選択する際の高校生や社会人の指向性や選好性が、より高まることを意味している。大学教育の多様性と魅力を表現するための取り組みについて考えるとき、教職員の間で何を共有するべきなのか、について知る良い機会であったと思う。

Report Part2

大西 淳之
(おおにしじゅんじ)



本学栄養学科准教授(生化学研究室)、学修・教育開発センター参事。
東京医科歯科大学難治疾患研究所、財団法人国際科学振興財団バイオ研究所を経て、平成22年本学着任 / 研究分野: 精神栄養学、健康生成論 / 著書: 『レーヴン・ジョンソン生物学上・下』(培風館)

学生たちとのランチミーティング

児童学科 戸田 雅美

学 修面をも含め大学生活の充実には、学生同士の友達関係と共に、教員と相談できる関係ができていくのが大きいかかわっている。以前は、個人面談を行っていたが、一対一で向き合ってしまうと学生も緊張したまま面談の時間が終了してしまうことも多かった。

そこで、ある年からこんな工夫をしてみた。最初のクラス懇談会で、「毎週〇曜日の昼休み、順番に私の研究室で《豪華ランチミーティング》をします。所定の時期までに、自由に4～5人のグループを作って、メンバーをこの用紙に書いて私の研究室のポストまで提出してください」と提案する。この《豪華ランチミーティング》という言葉に一瞬膨らんだ学生たちの期待は、次の私の「でも《豪華ランチミーティング》といってもみなさん自分のお弁当は持参をお願いします」という言葉に「なあんだ～」という雰囲気や笑いが起こる。「でも、デザートは何か用意して待っていますね」という具合で、少しだけ《豪華さ》を納得してもらう。「グループの用紙の提出期限後、〇月〇日に、グループミーティングをするグループの順番の日程表を私の研究室のドアに掲示しておきます。もし、都合が悪い場合は、別のグループの人と話し合ってもらって交換して、掲示の紙に訂正して記入しておいてください」と伝えておくと、大きな問題もなくランチミーティングの日程ができる。

ランチミーティング方式の良さとして私が感じていることは、学生たちの日常に近い姿が見られるということである。食事をしながら話したり、私が用意したお菓子を分け合って食べる中で、話題を提供するのが上手な学生、相手の話の受け止め方が絶妙な学生、おとなしく聞いていることが多い学生、相手をさりげなく気遣い場を和らげることが上手な学生、教員である私にも積極的に質問を投げかける学生など、日ごろの人間関係や特徴が見えることが多い。話題も、自然とそのときに学生が最も気にしていること(好きな授業や先生のこと、試験のこと、実習のこと、就職のことなど)に集中していくの

で、その時々学生の関心事が理解しやすい。さらに学生同士は日頃から呼び合っている呼び名で会話をするので、ランチが終わるころには、私も思わず学生同士の呼び方で話しかけていることもある。反対から見れば、担任である私の人柄もしっかり学生に見られているということでもあろう。最後には、「この研究室にいるから、また、誰かと一緒に、もちろん一人でも、気軽に来てね」と伝える。というように、研究室への垣根を低くする役にも立っているとも思う。

もちろん、いつも、この方式ではなく、3年次などには、個人面談も計画することもある。けれども、その頃には私と学生との間に安心できる関係が築けているためか、緊張せずに深い内容の話ができる気がしている。また、《ランチミーティング》の時点で気になった学生については、そのとき授業を担当している別の先生から授業中の様子を聞いたり、学生本人に個人的に声をかけて、一人でまた話に来るように誘うこともある。ランチミーティングのおかげか、そんな風に個人的に声をかけても、びっくりされたりすることが少ない点もメリットかもしれない。



戸田 雅美 (とだまami)

本学児童学科教授(幼児教育学研究室)、児童学科長。
鶴見大学を経て、平成12年本学着任/研究分野:保育学/著書:『保育実践に学ぶ』(建帛社)、『保育者論』(相川書房)、『保育をデザインする』(フレーベル館)



板橋キャンパス良いところ探し

造形表現学科 中村 精二



造形表現学科では、伝統的に授業、講評会、制作作品等が公開されています。特に近年では7号館1階の入り口ホールにあるミニギャラリー「なないち」で様々な授業の課題作品が週代わりで公開されています。

ここに最近展示された「板橋キャンパス良いところ探し」を紹介します。これは、学生が板橋キャンパスの生活環境を評価する環境学習として1年生全員が前期末に行ったものです。「良いところ」を探して伸ばすということは、環境に限らず私たちが良く育って行くために不可欠です。方法は、各自がキャンパス内を探検して「良いところ」を撮影し、持ち寄ってグループディスカッションするというものです。その結果は次の様でした。

【良い理由】豊かな緑、広い空間、木陰、涼風、建築や施設の造形、不思議なもの、生活感、生命感等々。

【ゾーンの特長】大きく4つのゾーンに分けられ①正門から120周年記念館、森を囲むゾーンは豊かな緑、子供や生き物。②中高建物から図書館、体育館、15号館を含むゾーンは建物と広い空。③プール、部室、学寮を含むゾーンは生活感。④十条門から16号棟周辺のゾー

ンは広い緑と樹木。とそれぞれの良さの特長が見つかりました。

※尚、11/1(土)～29(土)の間、全科目の授業が公開されます。



中村 精二 (なかむら せいじ)

本学造形表現学科教授(住環境造形研究室)、進路支援センター所長。
東京芸術大学非常勤講師等を経て、平成6年本学着任 / 研究分野: 建築学 / 著書: 『パブリックデザイン事典』(共著)(産業調査会)、『かたちと空間』(共著)(東京家政大学出版部)、他



東京家政大学は 大学IRコンソーシアムに加入しました。

大学IRコンソーシアムの概略を知っていただくために、コンソーシアムのホームページからその一部を引用します。(http://www.irnw.jp/)

平成21年度文部科学省戦略的連携支援事業に採択された「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出-国公立4大学IRネットワーク」において、学生の視点を重視し、学生に確実に成果を身につけさせるといった「学生本位の改革」を目指し、同志社大学が代表校となり、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学と連携を図りながら、IRの推進を通じて連携大学間の「相互評価」を活かした教育の質保証の枠組み整備に取り組んできました。(中略)

IR(インスティテューショナル・リサーチ)とは本来、教育、経営、財務情報を含む大学内部のさまざまなデータの入手や分析と管理、戦略計画の策定、大学の教育プログラムのレビューと点検など包括的な内容を意味しますが、我々の連携事業では、教学に特化したIR活動に焦点を置いて、連携事業を進めてきました。ここでは特に、①個別大学内での改善のための調査・分析と、IR先進国ですで行われている②ベンチマーキングのための複数機関間比較や全国調査による自機関の相対的な位置付けのための調査・分析という両方のIR機能に注目しました。連携事業で行ってきた「IRを通じての相互評価」の主要な課題は、この②ベンチマーキングのための複数機関間比較を通じて、教育課程の充実へと結びつけていく質保証の枠組みの整備です。(中略)

こうしたこれまでの取組の成果をより幅広く展開することにより、高等教育機関全体における学士課程教育の質保証システムを推進していくことを企図しました。その

ためには、コンソーシアムの形成によって、より多くの高等教育機関が参加できることが不可欠です。そして、一大学内ではなかなか進展できない教学IRを、4大学の連携により開発してきたシステムとノウハウを基盤として設立する教学IRを基盤とするコンソーシアムに参加することにより、より迅速に進展させることが期待できます。われわれは、学士課程教育の質保証システムを「大学IRコンソーシアム」を拠点として進展させることを目的に本コンソーシアムを設立するものであり、国公立大学の枠組みを超え、一校でも多くの高等教育機関が「大学IRコンソーシアム」に参加することを期待します。

東京家政大学がIRコンソーシアムに加入することで、以下のようなメリットがあると考えています。

完成度の高い学生調査を利用できる メリット1

東京家政大学生の学修経験や成長感の実態を把握することは、それ自体が大切です。教育改善の目標を設定する際にも、改善の効果を検証するときにも欠かせません。大学IRコンソーシアムに加入することで、完成度の高い学生調査を利用できます。必要であれば、本学独自の質問項目を交えて調査を行うこともできます。

東京家政大学の特徴を把握できる メリット2

大学IRコンソーシアムの加入大学数は、2014年1月の時点で18でしたが、8月には37まで増えています。これらの大学が共通の学生調査を実施することになり、自大学の結果を他大学の結果と比較することにより、自大学の強みあるいは弱みを明確に把握することができます。

多様な分析結果が簡単に手に入る メリット3

大学IRコンソーシアムが提供してくれるIRシステムを使えば、学生調査データを多様な角度から分析した結果を随時得ることができます。統計やデータ分析の知識・スキルは不要です。このようなシステムを自前で構築するには、多くの費用と時間を要します。

大学教育改革の動向に触れる機会がある メリット4

他大学との情報交換の場があり、大学教育改革の現状・動向に触れることができます。早速、8月5日に甲南大学で開催されたシンポジウムに参加してきました。全国の大学から約170名の参加者があり、内容もとても興味深いものでした。

教育の内部質保証のエビデンスとして使える メリット5

教育の内部質保証のエビデンスとして役立ち、認証評価の報告書に活用できます。

大学IRコンソーシアムの調査には、「一年生調査」と「上級生調査」があり、質問項目が若干異なります。初年度の今年度は、11月4日(火)から11月17日(月)の間に、「一年生調査」のみを実施します。「上級生調査」を2、3、4年生で実施する大学もありますが、東京家政大学では、今の1年生が3年生になったときから「上級生調査」を行う予定です。

調査データの分析結果は、大学IRコンソーシアムのIRシステムを通じてみることができますが、学修・教育開発センターとしても、種々の角度から分析をおこなない、学科・科にとって有益と思われる分析結果をご報告する予定です。